

2016 年度（平成 28 年度）金沢大学人間社会学域 法学類 編入学試験問題

（2015 年 9 月 1 日実施）

問 1 アメリカの政治哲学者による次の文章を読み、以下の設問に解答しなさい。

【引用文省略】

（マイケル・サンデル／鬼澤忍訳『これからの「正義」の話しよう いまを生き延びるための哲学』（早川書房、2011 年）392 頁最後から 2 行目から 394 頁 3 行目まで）

- (a) この文章で筆者は何を問題提起しようとしているのか簡単に要約しなさい。
- (b) 筆者の問題提起に応える形で、政治や法は本来どうあるべきか、近代の政治や法の歴史を踏まえうえて、あなたの意見を述べなさい。
- ((a)(b)合わせて解答用紙 1 枚以内に収めること)

模範解答例 + 講評

(a)リベラル派は、政治や法は道徳や宗教の問題に関して中立性を保たねばならないという立場を取っているが、それは論理的に不可能である。中絶するかどうかを一人で決める権利を妊娠する女性に認めることは、胎児の道徳的地位を否定することを含意しているからだ。政治や法は、道徳や宗教の問題を避けて通ることはできない。

講評：中絶を例として、政治や法の中立性について論じていることを理解できているかがポイント。配点は 30 / 100 点。

(b)筆者は、政治や法が道徳や宗教の問題に関わるのは当然だという立場を取っているように思えるが、私は積極的に関わりすぎるのは危険だと思う。近代の自由民主主義は、政治や法が道徳・宗教をはじめとする価値観の問題にはできるだけ干渉せず、個人の生き方の選択に任せうえて、全ての市民に関わる公共的な事柄だけを民主的な手続きに従って決定することを原則としてきた。私的領域と公的領域を分けることによって、個人の自由を尊重する自由主義と、全員に関わることを話し合いによって決める民主主義を両立させることが可能になる。従って、法の道徳・宗教的な中立性は、民主主義と表裏一体の関係にある。西欧諸国を中心に自由民主主義が定着するようになったのは、そうしたやり方が人々の支持を得、社会を安定させることに寄与しているからだ。政治や法が、道徳や宗教の問題に積極的に関わるようになれば、公／私の境界線が曖昧になり、人々は、他者からの干渉を恐れて、安心して自分の生き方を選択できなくなる。確かに筆者の言うように、妊娠中絶の問題を、

個人の自由に任せることはある道徳的判断を含意しており、その点について争いがあるのは否定することはできない。しかしながら、妊娠中絶や尊厳死・安楽死のように、人間の命の限界に関わる問題はかなり特殊な事例であるうえ、当事者の生き方を大きく左右するので、社会が無暗に干渉していいとは思えない。こうした特殊な問題を、本当に一人の個人の自己決定に委ねてよいのかについて――当事者に対するプレッシャーにならないような形で――広範な公共的な討論を続けるべきということには賛成だが、それを道徳・宗教の問題一般に広げることには反対である。これまで確立され、機能してきた公／私の境界線が多少変動することはあるかもしれないが、一気に相対化させて、政治や法があらゆる問題に干渉できる状況を作り出すべきではない。(反対側に立った場合の解答案)

講評：歴史的背景を踏まえて、政治や法が中立性を保つ努力をすべきか、それとも、中立性という建前を捨てるべきかについて、自分の意見を明示し、それを一貫した論理によって正当化できているかがポイント。70 / 100点。自分の知っていることを羅列しているだけで、一貫性のある正当化になっていない答案には高い点数を与えなかった。「中世における絶対王制…」など、間違っている歴史的記述は適宜減点した。中絶の問題にひっぱられて、(b)の主旨からずれている答案は大幅に減点した。

問2 日本の政治学者による次の文章を読み、以下の設問に解答しなさい。

【引用文省略】

真淵勝『風格の地方都市』（慈学社出版、2015年）56-57頁を一部改変。

- (a) 俗にいう「ハコモノ」とはどのようなものか、上の文章から推察し、上の文中の空欄に入るであろう、博物館以外の具体的な施設をいくつか挙げなさい。
- (b) 下線部「(直感的には)違和感はあるが(理論的には)決着をつけがたい」とはどのような意図で述べられた表現か。具体的な施設を挙げつつ「違和感」と、なぜ「決着をつけがたい」のかについて説明しなさい。
- ((a)(b)合わせて解答用紙1枚以内に収めること)

出題趣旨と講評

問(a)では、俗に「ハコモノ」と称されるものについて、どのようなものか、という一般的な用語の知識を問うた。出題の通り、文章からも推察可能である。

問(b)では、文章の読解力とともにその背景を推察できなければ答えにくい問題である。「利用されていない施設は無駄」かどうかについて、なぜ無駄なのか、また、決着をつけがたいのはなぜか（つまり、「無駄ではない」という論を支えるものは何か）を考えなければ答えられない。

問(b)は問(a)に比べて、残念ながら圧倒的に低評価の解答が多かった。「答えがない」社会において、対立する議論の論拠を正しく知る、あるいはすくなくとも推察することができなければ「答えがない」という現状すら正しく理解できないだろう。つまりなぜ(自分の持つ)「答え」に沿った社会になっていないのか、という疑問から先に進めないだろう。知識・情報の表層をなぞるだけでなく、背景を知る意欲を持ってもらいたいと感じる。

---

【面接】(13時から15時まで)

受験生自身が関心を有している最近の法的・政治的な社会問題を挙げてもらい、それについて質疑応答をすることで、当該問題の正確な内容を理解しているか、自分の意見を論理的に主張できるか、相手の質問に的確に答えることができるか、といった点を確認するとともに、場合によっては志望理由書の内容についても質問を行った。